

# 地域の国際化を目指す高大連携の可能性Ⅱ —とくしま異文化キャラバン隊の活動を通して—

生駒 佳也  
IKOMA Yoshiya  
徳島市立高等学校

Gehrtz 三隅 友子  
GEHRTZ-MISUMI Tomoko  
徳島大学国際センター

要旨：2009年から現在まで徳島市立高等学校と徳島大学国際センターは、徳島大学留学生の高等学校訪問による交流学习を実施してきた。互いの教育目標に基づき、交流学习が国際化を目指す教育活動の役割を果たすとして「地域の国際化を目指す高大連携の可能性-交流活動のもたらすもの-（2011）」に考察している。さらに2013年に文部科学省留学生拠点整備事業及び徳島県の地域活性化事業の枠組みの中で、高校生・日本人学生・留学生が協力して地域の文化を守る活動を行った。本稿は担当者の二人が高等学校と大学の教員の立場から、継続している交流学习と新たに地域を舞台に、地域の人たちとのかかわりの中で実施した交流活動の二つを参加者らの評価をもとに考察し地域の国際化、多文化共生への取り組みを考えるものである。

キーワード：日本語教育、異文化理解教育、国際交流、体験学習、多文化共生

## 1. はじめに

徳島大学国際センターと徳島市立高等学校（以下市立高校あるいは高校と記述）は、徳島大学高大連携の趣旨に基づき2009年から毎年、7月には大学から教員が出向く2年生対象の出張講義を、1月には留学生が高校を訪問して1年生との交流学习を続けている。これらに加えて2013年度は、文部科学省と県の事業の枠組みの中で、10月に徳島県美波町日和佐で行われている秋祭りに参加し、地域の文化遺産を地域の人と共に守る活動を行った。本稿はこれまで続けていた交流学习と新たな活動「とくしま異文化キャラバン隊」の二つを参加者らのアンケートをもとに考察し、「地域の国際化を進める」、さらにこれからの「多文化共生のまちをつくる」ための活動の可能性を考える（注1）。

表1

年度	出張講義 7月・約40名	訪問・交流学习 1月・約320名	異文化キャラバン隊 10月
2009年度	○ 2年生対象	○ 1年生対象	-
2010年度	○ 2年生対象	○ 1年生対象	-
2011年度	○ 2年生対象	○ 1年生対象	-
2012年度	○ 2年生対象	○ 1年生対象	-
2013年度	○ 2年生対象	○ 1年生対象	1-3年生10名 留学生12名 日本人学生7名
2014.5年度	継続予定	継続予定	継続予定

## 2. とくしま異文化キャラバン隊

### 2.1. 文部科学省留学生交流拠点整備事業

文部科学省は、平成24年度から「留学生交流拠点事業」を公募した。これは次を目標とする調査研究事業である。「徳島外国人留学生の受け入れの促進を図るため、各地域において、大学・地方自治体・地元経済団体・NPO・ボランティア団体等が連携して、外国人留学生と日本人学生・地域の住民・児童生徒・企業等との交流を深めながら、地域ぐるみで、外国人留学生の生活や就職を支援しつつ、地域経済活性化、街づくり、教育支援や観光振興等に外国人留学生の力を生かす仕組みを構築するための実践的調査研究を、大学を中心として地域コンソーシアムに委託する。モデルとしてのその成果は広く全国の大学や自治体等に提供することで、それらの取り組みを支援・促進し、我が国における留学生交流の一層の推進を図る。（文部科学省ホームページの授業主旨より）」

この主旨に従い、徳島大学国際センターでは「異文化キャラバン隊による国際化と新たな地域の創成-留学生との交流による多文化共生まちづくり-」を提案（応募）し、平成25年に採択され、本年を含む平成25年から27年の三年間で実施することとなった。

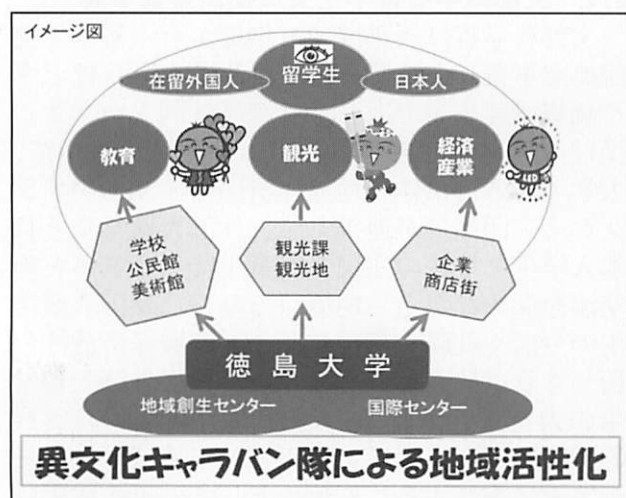
### 2.2. 徳島大学の事業概要と目標

この事業は、徳島大学が中心となって地域コンソーシアム（協力関係の基盤）を組織し、県内の留学生と日本人学生からなる「異文化キャラバン隊」を各地域へ派遣し、地域の人々との異文化交流を通じて「外国人が身近にいることが当たり前の国際社会」・「文化や習慣の違い

を認め合いながら暮らしている姿」を実現するものである。この異文化キャラバン隊が徳島市内、県西部、県南部地域へ出向き、留学生にとっては日本語学習と日本文化学習を、地域には異文化交流を通じた活性化と外国人と共生できる人材の育成も目指している。さらに、これらの活動を実践的調査研究とし、事業終了後はこの取組を一つのモデルとして提示することが期待されている。そこで以下四つの目標を実現しながら事業を進めることにした。

- ① 地域コンソーシアムの組織化
- ② とくしま異文化キャラバン隊の派遣による人材育成
- ③ 留学生の視点からの地域活性化  
地域の魅力発見・資源発掘・産業振興
- ④ 様々な機関・組織との協力による留学生支援活動、交流事業、街づくり

図 1



### 2.3. とくしま異文化キャラバン隊

とくしま異文化キャラバン隊（以下キャラバン隊と記述）は、徳島県内の留学生・日本人学生（大学生・高校生）によって組織される。その特徴は、①学内から地域へ：留学生の所属する教育機関から離れてより広い地域での交流活動を目指す。②留学生がより主体的に：自発的な行動と意見が出せるように彼・彼女らの視点を大切に、関わった人たちが学び合うことを目的とする。③地域の活性化：留学生による魅力の再発見と世界への発信を目指す、の三つである。留学生が主体ではあるが、キャラバン隊内部での日本人学生との協力、相互支援による協働の学びを最初に考えている。何よりも、地域の人にキャラバン隊を知ってもらうために、キャラバン隊は、目印に鳴門の渦の横に二

羽の千鳥がついたオレンジ色のエプロンをつ



けて活動を行うことにした。

<キャラバン隊 2014 年 2 月報告会にて>

### 2.4. キャラバン隊の活動：PLAN1-4

前述の県内三地域、市内を PLAN1、県西部を PLAN2 に県南部を PLAN3、さらにそれらを包括する活動を PLAN4 と名付けている。

図 2



それぞれの PLAN の特徴を簡単に説明すると、PLAN1（徳島市内）は、大学といった機関から出て、市内のイベントや教育活動に参加することでもある。そこでより多くの地域住民が留学生と触れ合う機会を持ち、日常的なつながりを促進することを目的としている。本稿の高校訪問による交流活動以外には県立美術館での鑑賞活動や毎月最終日曜日に開催されているとくしまマルシェで活動を行っている。

PLAN2 は県西部特に美馬市にて、ホームビジット、小学校訪問そして脇町劇場オデオン座での国紹介・演劇・交流会（この一連の活動は総称をまほろば国際プロジェクトとする）を実施している。

PLAN3 は県南部地域における様々な活動で、これまでも徳島大学地域創生センターが活

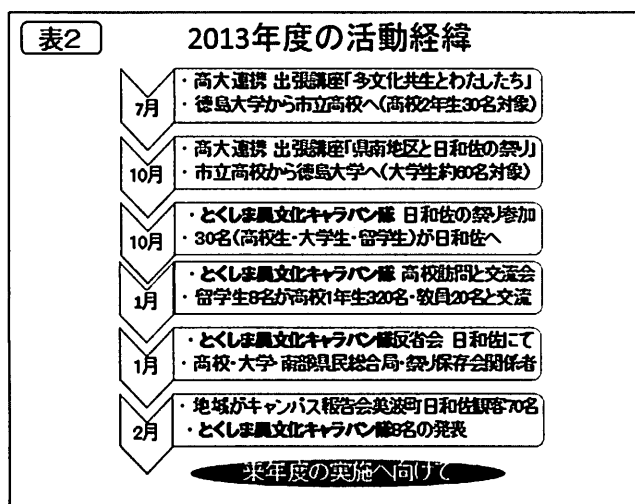
動を続けている那賀町、上勝町の町おこしをはじめ、今回新たに美波町（日和佐・赤松地区）の祭りを中心としたイベント等の、いずれも地域の問題を共に考え解決を図るものである。

PLAN4は、地域を問わず上記三つを実施しながら成果をコンソーシアムづくりへと向ける活動である。最終年度のフォーラム準備をしつつ多文化共生のまち作りのための提言を考える。

そして本稿では、留学生のみによるキャラバン隊が PLAN1 の中で高校を訪問する活動と PLAN3 の中で高校生と留学生と日本人学生の三者によってキャラバン隊を組織し、県南部に出かけて祭りに参加する活動を対象とする。メンバーと地域を複合的にとらえて実施したものである。

このような形の実施理由としては、徳島県南部総合県民局「地域がキャンパス」（注3）事業との連携の依頼があったことが挙げられる。繰り返すが、これまでの交流のみの活動を、今年度からの文部科学省の採択事業と、上記の県南部の「地域がキャンパス」事業に合わせて広く柔軟に実施することを試みたと言える。

表2



### 3. PLAN2「日和佐八幡神社秋祭」への参加

#### 3.1. 祭と地域社会

今回、参加した秋祭は、徳島県南部の美波町日和佐地区（同地区は1889年日和佐村として発足、1909年日和佐町となり、1956年赤河内村と合併、2006年由岐町と合併し美波町となる）の八幡神社に伝わるものである。

同地区は10世紀に成立した『和名類聚抄』に記された「和射」にも比定されており、また同時期の『土佐日記』では「かいぞく」の出現をおそれられた海域にも想定されている。さら

に平城京出土木簡に「和佐」から「海藻」が納められた記録からも、古代より海路を通じて畿内とつながりを持ち「海を活動の舞台とする人々の居住と生産の場」（丸山1994）であったことがわかる（注4）。この集落の中心となったのが日和佐神社であり、同じく10世紀の『延喜式神名帳』に登場する「和射神社」がその前身であると考えられている（『海部郡誌』）が、14世紀半ばに創祀とも伝えられている（『阿波志』）。

現在、日和佐神社の秋祭には8基の「ちょうさ」（太鼓屋台）が繰り出す。祭りに登場するちょうさの記録は18世紀にさかのぼる。現存するちょうさのうち最も古い記録が残るのは戎町の1795（寛政7）年のものであり、他4基も19世紀前半につくられた記録（注5）がみられる。

この祭の背景には、近世初期において大坂市場と結びついた日和佐の薪（保佐木）を中心とした廻船業の発展（注6）があげられる。大坂の「燃料基地」の役割を果たした日和佐の中で、初期の豊後屋に代わって天明期に台頭した谷屋が大坂の祭を導入し、地元戎町のちょうさを作らせたといわれている。「海の道」を通じて上方と結びついた経済圏がちょうさを移植する契機となったのであろう。同様の祭は大坂・兵庫を中心に関西から瀬戸内海沿岸地域に広がっている。

ただし、日和佐の祭の特徴は、「お浜出—お入り」との儀礼を中心にすえており、「八幡神社の神霊が、海の潮によって一年のケガレを落とし霊力を更新するという意味」と他界（海）から此界（里）に「豊穡（幸）を呼び寄せるといふ意味の、二つの意味」がこめられている（高橋1997）。

このため、祭自体は漁業と密接に結びついてきた。明治初期には旧暦8月15日に祭を実施していたが、明治中期以降には遠洋漁業（中心は九州地方）が本格化し、新暦9月15日に改められた。徳島県漁船は九州出漁団を結成し、漁場の開拓にあたったが、その中心となったのが日和佐漁民であった（このため県水産試験場や県立水産高校が日和佐に設置されている）。当初は梅雨時から8月にかけて九州での漁業を引き上げ徳島に帰り、船の修理と漁具の整備を行い、神社の祭礼を済ませて回航していたが、出漁時期により「祭礼が遅れる悪弊」（注7）が生じていた。このために祭の時期を移行したのである。しかし、新暦9月は「台風や悪天候が多く」（注8）1966年よりさらに10月に移行している。

地域社会の発展を願う祭礼が生業の変化に伴い形態を変えていったことがわかる。

### 3.2. 日和佐ちょうさ保存会

日和佐地区の人口は明治期の漁業の発展とともに増加し、戦後の1950年には9801人とピークを迎える。しかし、2012年では4918人と半減し、中でも祭を支えていた漁村の中心地区の人口減少が著しい。鉄道や国道の陸上輸送網が漁村を離れ、薬王寺の門前町側についたたことも影響し、町の人口移動と同時に過疎化が進行し、8基あるちょうさの担ぎ手の不足が地区の元中心地で進行したのである。

秋祭は神社の氏子組織で運営されており、ちょうさを持つ自治会ごとの子どもが太鼓の叩き役となり、やがては担ぎ手となり、自治会の運営の中心となるサイクルが確立していた。しかし、過疎化は自治会の枠を越えて進行し、従来の氏子組織では祭の維持自体が困難になってきた。

このため2010年9月1日に「日和佐ちょうさ保存会」が町内有志により設立され、自治体や氏子組織を越え「『ちょうさ』8台の奉納運行の保存を目標に活動」している。この活動の一環として祭のフォトコンテストや、カレンダー・ポスター作成、またちょうさの担ぎ手の募集を行っている。

### 3.3. 徳島県「地域がキャンパス事業」

徳島県南部総合県民局では2012年度より美波町を舞台に県内大学とともに「地域がキャンパス事業」を展開してきた(注3)。美波町の自然や文化、歴史などを題材に教育と地域振興をつなぐ事業である。

美波町の中心である日和佐地区は従来の生業であった漁業に加え、高度経済成長期には薬王寺や赤ウミガメを観光資源とし県南部の観光の中心地となってきた。また、県立日和佐高校、同水産高校が設置されていたが、学校統合により2006年と2009年に相次いで統合閉鎖され、急速に進行した過疎化に加え、若者人口が著しく減少している。「地域がキャンパス事業」は、この変化を補う役割も期待されており、地元の観光ボランティア団体、環境保護団体、歴史文化保存団体など地域振興団体の協力を得ている。

筆者の生駒(日和佐地区在住)と三隅は、南部総合県民局と「地域がキャンパス事業」の新たな展開について相談する中、留学生拠点事業として、地域の歴史文化を通じて、新しい高大連携教育が展開できないかと考えた。「はじめに」で述べたように市立高校と徳島大学国際センターは2009年より高大連携教育の推進にあ

たってきた経緯があるため、留学生だけでなく、日本人学生や高校生を交えて、地域の人々とともに祭礼に参加することで新しい教育効果が生まれると期待したのである。

このため、10月12・13日に行われる日和佐八幡神社秋祭と、同13日夜に行われる美波町赤松神社奉納吹筒花火に地元の保存会の協力のもと参加することになった。

赤松神社吹筒奉納花火は、日和佐八幡神社秋祭のように歴史や経緯が十分明らかになっていないが、地域に残る「吹筒煙火」の製法を伝える「意匠」によると1821年(文政4)年以前より続く、手作りの花火を用いた豊作祈願の秋祭である。赤松地区は那賀川流域の農村であり、文化的には那賀町相生地区と一体化しており、両地域ともに吹筒花火の伝統をもっている。赤松地区も過疎化が進行しており、吹筒花火を維持するために1995年に赤松煙火保存会を結成している。二日間に渡り漁村と農村の祭を体験することを通じて地元住民との交流をはかる計画を立てた。

### 3.4. 参加者

参加者の内訳は、高校生10名(男子5名、女子4名・3年生4名、1年生6名)、留学生12名(中国3名、スウェーデン2名、アイルランド2名、ラオス、エルサルバドル、ブラジル、ホンジュラス、インドネシア各1名)、日本人学生7名(1年生、男子3名、女子4名)である。総勢29名でキャラバン隊を結成した。

高校生は、総合学習の一環として、地域文化や国際交流に関心のある生徒を募集した。また、留学生は日本事情と日本語研修コースの授業の中で参加を、さらに日本人学生は授業で呼びかけた者と市立高校の卒業生に声かけを行い、参加者を確定した。

### 3.5. 活動内容



<日和佐神社に集合したキャラバン隊>



10月12日は、宵宮として本祭の前日にちょうさが町内を巡航し(1960年代より町廻りの際に家屋や塀の破損がおこるため車輪をつけるようになっている)、各家庭や店舗からお花(祝儀)うける。これは祭の運営費に充てられ、お花を出した家の前ではちょうさを差し上げる。町内を一巡したちょうさは夕方には神社に帰り宮入りする。

当日朝に美波町に到着した学生は、ちょうさ保存会より、祭の日程と参加にあたっての諸注意を聞いた後、男子学生は、もっとも担ぎ手が不足している本町と西町のちょうさに配属、女子学生は地区内の若い女性達によって1980年代に作られたギャル神輿(八幡神社の氏子青年団に所属)に参加した。本祭のちょうさや神輿の担ぎ手、太鼓打ちは男性に限られるとの伝統をもってきたが、女性は主に接待や食事の準備など祭の裏方としての役割を担ってきた。しかし、若者人口が減少した現在、本町の太鼓は女子に寄って担われ、町廻りには女性も担ぎ手として参加するようになっている。

ギャル神輿は、毎年一番太鼓になったちょうさの後を巡航するため女子学生は、今年が一番太鼓である戒町のちょうさの接待役の補助を担うことにもなった。

男子高校生は「全身筋肉痛になりました。」「あの声の大きさ、迫りにビックリしました。」との感想について「一日目は町の構造がよくわかり楽しかったです。」との言葉を加えている。



〈ちょうさのお浜出〉

また女子高校生は「一日目はギャル神輿を担がせてもらったのですが、地元的女子高生がとても親切にいろんなことを教えてくれました。日和佐のこと以外にもお互いの高校生活なども話し、とても仲良くすることができました。」

との感想を残している。夜には境内での奉納花火見学に参加した。

10月13日は本祭で、大浜海岸を含む境内をちょうさが練り歩き、浜入りしやがて宮入りする。男子高校生は「二日目は神輿を担ぎ、そのまま海に入るというハードなものでしたが、流されて救助されながらも、最後まで担ぎきることができました。」との充実感を伝えている。

今年は担ぎ手の少ない西町・本町に学生達が参加したため、両ちょうさが境内を練り歩く時間も長く、祭の終了がいつもより1時間以上遅れることにもつながった。このことは他のちょうさの担ぎ手からも好意をもたれている。

### 3.6. 評価

#### 3.6.1. アンケートの結果

事業評価として活動に関わったキャラバン隊のメンバーと地域の人に対してアンケート(資料1 地域用を参照)を実施し、キャラバン隊29名と受け入れ側の地域の対象者19名から回答を得た。

日本人(高校生・日本人学生・地域)へは、

- 1) 留学生と参加することへの不安の有無
- 2) 参加して留学生に対する印象は変わったか
- 3) 次回も一緒に参加(受け入れ)したいか
- 4) 留学生のアイデア等を取り入れたいか
- 5) 留学生との交流に関する意見

さらに高校生と日本人学生には

- 6) 県南部の問題と解決策の意見(自由記述)

を加えた質問を行った。

留学生には、次の項目を質問した。

- 1) 秋祭りに関して
- 2) 生徒・学生・地域の人と交流ができたか
- 3) 日本文化への理解が深まったか
- 4) このような活動に参加したいか
- 5) 感想と意見
- 6) 地域の問題を解決策への意見
- 7) 祭りで驚いたこと
- 8) 自国の祭りとの違い

キャラバン隊には参加するだけでなく、留学生との交流を振り返ること、地域の人とのふれあいによってこの地域の持つ問題を知り、その解決策を自分なりに考えることの二つの回答を期待した。地域の日本人には、留学生を含んだキャラバン隊の受け入れに関して、である。

以下①高校生②日本人学生③留学生④地域の結果を記述する。

①高校生（10名）と大学生（7名）17名：

- 1) 留学生との参加に対して、不安があった者は12名で自分の英語力を考えて意思の疎通が取れるかどうか不安であるとの記述があった。
- 2) 変化に関しては、11名が活動後、印象が変わったとしている。いろいろなタイプの留学生がいること、留学生から日本への鋭い意見を聞いて驚いたことや思いのほかコミュニケーションが取れてほっとしたことも書かれていた。
- 3) また一緒に活動に参加したいかは17名全員が何よりも楽しかったから、参加したいと回答していた。
- 4) 留学生の視点を使ったアイデアに関しては「ある」が8名で、英語や他の外国語を使う場として交流会や討論会をする等を挙げていた。「ない」が9名であった。
- 5) 留学生との交流に関しては、14名が記述、
- 6) 今回は普段できない体験であったこと、日本語の上手な留学生とばかり話していた反省、二日間一緒に宿泊そして祭りを体験することが本当に楽しかったことを述べている。
- 7) 地域の問題に関しては、11名が「高齢化・少子化」に関して、今回のような祭りを支援するだけでない町おこし＝イベントでないような取り組みが必要なことを記していた。

②地域の受け入れ側の人たち19名：

- 1) 留学生の受け入れに対して15名が不安であったこと、言葉や考え方や習慣が違う点で問題があったときの対処についての危惧や、外国人にこの祭りが伝わるかどうか、また楽しんでもらえるかといったことが書かれていた。
- 2) 印象の変化は13名が「変化があった」とし、具体的には、留学生の順応性、非言語でのコミュニケーションができたこと、人柄の良さを感じることができた等、肯定評価への変化を書いていた。
- 3) 今後の活動参加に関しては、18名が参加してもらいたいとし、1名は無回答であった。「何よりも地域の活性化に役立つ、担ぎ手が必要、日本の文化に触れてほしい、大歓迎、よい刺激を受けた」等の記述があった。

- 4) 留学生の視点を活かした活動に関しては、アイデアが「ある」7名、「ない」6名、「わからない・無回答」6名であった。「報告会の開催、料理教室、小中学生との交流会、異文化交流キャンプ、地元の再発見、祭りに参加する際のルールづくり（外国語で）」等の具体的な意見が挙げられた。
- 5) 今後の交流に関する意見は13名が記述。
- 6) 「留学生の自慢話、日和佐の意見や感想を聞きたい、日和佐に来年もきてほしい、イベントをしていきたい、日本語を使った交流をしたい、留学生の意見を取り入れたい、長期的な交流を望むし、初めての人も歓迎する、異文化交流は人の価値観を変えるのでよい」という意見があった。

③留学生（12名）：

- 1) 12名全員が参加してよかったとしている。
- 2) 交流ができたかは、10名ができた、普通が2名であった。
- 3) 日本文化について12名全員、理解が深まったとしている。
- 4) 今後も12名全員が参加したい。
- 5) 感想としては、祭りに感動し、とても楽しかったことに加えて、もっと自由時間があればもっと町を知ることができたという意見もあった。
- 6) 問題に関しては、人口が少ない中で祭りを継続することの必要性が書かれていた。また祭りだけでは問題があまり認識できなかったというのもあった。
- 7) 驚いたことは、「祭りも人もエネルギーだったこと、ちょうさが重かったこと、お祭りのための組織や体制があること、参加者みんなが助け合い熱心だった」を挙げている。
- 8) 自国との比較では、「スウェーデンの伝統行事よりも関係者がたくさん時間をかけていること、アイルランドの祭りは規模が小さい、自国の宗教に基づく祭りとの違い、エルサルバドルでは子供によって行われる祭りが多く今回の豊漁を願う祭りは初めてだった」といった感想が得られた。

3.6.2. 考察 大学側から

留学生との活動が高校生（10名中9名、1名は留学経験者）にとっては全く初めての経験で不安だったことが伺える。しかし活動後、英語や日本語そしていろいろなコミュニケーショ

ンを使えばいいことや何よりも留学生から歩み寄ってくれたことから不安が解消されたようである。これは地域の人たちも同じで（19名中15名）、こちらは個人の関係性よりも、祭りについてのルールや生活習慣の違い等から、何かトラブルが起こった際に解決ができるかの心配であった。これも特に問題がなかったため良い評価へと変わっていった。実際に担ぎ手への食事の配慮として、イスラム圏の学生のために豚肉を使わない、無理にお酒を勧めない、食べやすいサンドイッチを入れる等の工夫がされ、それが留学生らに受け入れられて安心したことも聞いた。たくさんの外国人に対する情報を知識として知るよりも、まずは一緒に活動すること体験することの大切さがわかる。

さらに今回の体験をもとに次の活動に関しては回答者48名中47名の「また一緒に活動したい」が得られたことと、「したくない」ではなく無回答が1名いたことを確認しておきたい。

地域の問題に関してはこの活動のみでは単純に解決できないことはもちろんだが、キャラバン隊のメンバーがしっかり問題として意識し、その解決策に対して自分なりの意見を書いていたことが本事業の目的として成果があったように考える。また活動後、町の関係者から個別に大学へ連絡あり、今後の祭りへの参加以外に何らかの形でキャラバン隊との交流依頼を受けた。祭りへの参加を継続しながら地域の活性化を共に考える予定である。

### 3.6.3. 考察 高校側から

交流の意義は、第一には地元の人々から得られるものであった。徳島市内の高校に通う高校生にとって漁村や農村の祭は初めての経験であったし、そこでのふれ合いは同じ高校生から年配の方々まで及んだ。このため「お祭りを楽しむために、もっと地元の歴史を知れば楽しめたのではと思います。見て参加しているだけでもとても楽しい。しかし、祭が始まった背景など知っていると、もっと身近なものに感じられると思います。」とのさらに興味を深めようとする感想につながっている。

次に留学生・大学生との交流については、「日本語はもちろん慣れない英語での会話においても、気持ちを伝え合うことで、相互の理解が深まる実感と喜びが得られた。」とのコメントがあったが、さらに「留学生のビルが花火を見て『やっぱり日本っていいね』と言ってたのを聞いて日本に生きている良さを再確認することができました。」との自文化の再認識につながっていた。

中でもこの交流を契機にグローバル化のメリット・デメリットについて考えを深めるレポートも見られた。

「…10月には徳島県美波町で行われる秋祭りに徳島大学の留学生とともに参加し、中国やスウェーデン、ラオスといった様々な国の学生と地域の文化を共有した。このように国境を越えた「人」との交流の場が増えたのもグローバル化が進んだ現在ならではの特徴と言える。

これまで述べたように、グローバル化によって質の良い「物」が安く手に入られること、インターネットの普及で多くの情報が飛び交う中、「文化」が拡張、発信されること、国籍を問わない「人」の移動が広がり、交流の機会が増えることなど、私たちに多くのメリットをもたらす。しかし、表裏一体のようにグローバル化によって生じるデメリットもたくさんある。海外から輸入された食品が安く手に入ることにより地産地消が失われる可能性があるように、国境を越えて「物」や「文化」や「人」が移動することは、大切にすべき自国や地域のものを消滅させる危険性がある。また、グローバル化を促進し、多大な影響力をもつインターネットであるが、少し前に広く読まれた『世界がもし100人の村だったら』では、コンピューターの所持者は一人しかいないとされている。これはグローバル化の進行によってますます拡大する格差を表し、このような格差ゆえに南北問題が固定化されてしまう。日本に住む私たちによって、目まぐるしく進むグローバル化からは逃れることはできないが、うまく利用することは可能であり、そのメリットとデメリットを理解した上で、上手につきあっていかなければならない。」

筆者（生駒）は以前に祇園祭が戦後の国民的歴史学運動の中で最定置される過程を共同研究した（注9）。そこでは、戦後民主主義の中で「町衆」の新たな捉え方が登場し、それをもとに祇園祭のイメージが再考され、学生たちによって紙芝居として流布し、それが出版されたことから、小説、さらには映画になって現在の解釈が定着した過程を見出した。

「伝統」と称されるもの自体絶えず新たな意味合いを賦与され、解釈されるが、今回に参加した日和佐の秋祭は、ボブズボームの指摘とは逆に「伝統」を通じて、新たな社会交流が展開する過程にあたるともいえよう。

今回の試みにおいて参加した3年生4名のうち、すでに進学先が決定した3名はすべて国際関係学部を選択した（内一人は参加が契機となり徳島大学に進学を決定している）。資料に

も見られるように、彼ら彼女らの考え方は、単に受験に特化した教育では得られないものである。

高校は進学圧力を背景にしない中等教育のあり方について自らを精査する時期を迎えているように思われる。同様に大学も進学率が同齡人口の半数を越え、高等教育の役割が変化している現在、高校とともに地域に根ざした教育の内容について連携をもとにした教育内容を提供する必要にせまられているように感じた。

### 3.7. 地域がキャンパス報告会

2014年2月16日、美波町コミュニティーホールにおいて「平成25年度『地域がキャンパス』推進事業報告会」が行われた。当日は徳島文理大学が美波町のPRビデオ作りを報告し、徳島大学と市立高校が秋祭参加を通じて学んだことなどを報告した。参加者は徳島大学留学生2名、総合科学部1年生1名、医学部1年生1名、市立高校1年生2名である。まず、市立高校生は、祭の参加を通じた感想をもとに地域の人々とのふれあい、また留学生との交流、さらには伝統的な行事に「よそ者」としての自分達を受け入れてくれた地域性が今後のグローバル社会を考える視点となることを提示した。

#### 私たちの考え

1. 変わったもの      変わらないもの

歴史

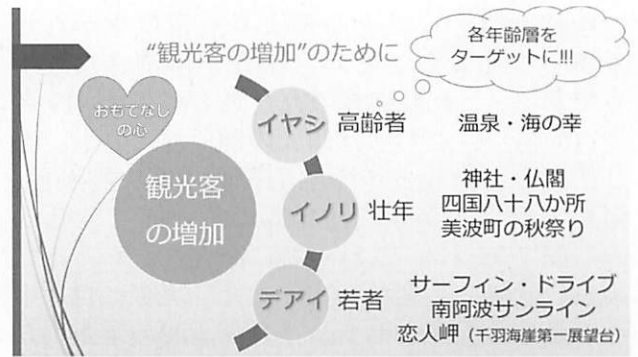
2. 高3（女子）の感想から

『このように国境を越えた「人」との交流の場が増えたのもグローバル化が進んだ現在の特徴』

→日和佐が上手くグローバル化に順応している印象

<高校生の発表の一部>

また、留学生は来日して間もない時期に日和佐の祭に参加するという劇的な体験と地域の人々へのお礼を日本語で伝えた。さらに医学部生は、徳島県夏期地域医療研修で県南部の実情にふれ、興味をもったことが祭参加のきっかけとなったことを紹介し、ちょうさを担いだ体験、吹筒花火の火花を受けながら走った体験、町の人々の親切にふれ、美波の魅力を「いやし・いのり・であい」の町として表した。聴衆は地域の人約100名であった。



<大学生の発表の一部>

### 4. 交流学習活動 2014年1月17日

交流活動は別紙資料1のとおり実施した。8名の留学生（うち研究者1名）が「異文化キャラバン隊」として、8クラスに分かれて参加した。活動としては、まず留学生によるクラスでの特別授業、次にカフェテリアにての一緒の食事、午後からクラスごとに留学生のために設定した交流会、最後に2・3年生希望者による交流会であった。留学生による授業は、パワーポイントを使った国紹介や専門についてクラスによっては積極的な質問がなされていた。昼食時には留学生が多数の生徒と一緒に、あるいは少数のメンバーで顔を突き合わせて食事をする留学生等8クラス8様であった。

交流会は、茶道・書道・剣道といった日本文化紹介や、漢字紹介、ドッジボール(2クラス)、日本の遊び、鬼ごっこ等の体験型の活動が準備されていた。今回のキャラバン隊のメンバーは10月から日本語を学び始めた6名、未習者1名、中級1名という日本語力の情報を提示していたため、交流会では言語説明が必要なものより体験型を設定したクラスが多かった。また自分たちで英語による説明を準備している様子も見られた。



<控え室に飾られた7つの国旗>



#### 4.1. 高校側アンケートから

今年の交流会の特徴は、留学生に教員・博士課程在籍者、また秋祭の交流会で市立高校生と交流をもっている者が多くいたことであった。このため例年と異なり、留学生自身に自国のことや自分の専門についての授業をしてもらい、その後に交流会をもった。

##### 【生徒のアンケートをもとに】

「ホンジュラスに行きたいと思ってしまうような楽しい授業でした。この国のことをよく知らなかった分、名所や文化などを新鮮な気持ちで知ることができた。」

「エルサルバドルのこと、みんな興味津津だった。」

「全く知らないモンゴルの文化にふれることができ面白かったです。」

「普段聞けないこと、初めて知ったことなど楽しいことばかりでした。特にポーランドのお話はどれも楽しいものばかりでした。」

などは、今回の留学生による授業が新鮮な関心をよんだことの表れである。さらに「中国の有名な唐詩について学んだ。中国語を初めてこんな間近で聞くことができた。発声練習もした。すごかった。」

「(同じ)一つの漢字を使うのでも中国の意味と日本の意味がちがっていた。」

は、日本の授業で習う漢文が異なる視点からとらえられた喜びである。

交流会に関しては、英会話についての感想が圧倒的に多いが、交流自体を楽しむ感想も見られた。

「英語で会話できる自信もなくて、緊張していたけれど、いざ始まると留学生の方々がたくさん話をふってくれたり、自分の国の話をしてくれたので、すごく楽しむことができた。カタコトの英語を理解してくれようとしてくれて嬉しかったが、もっとうまく英語で会話できるようにになりたいと思った。」

「英語がきれいに話せなくても、日本語が話せなくても、コミュニケーションはとれるし、楽しむことができるんだと気づきました。」

は、その代表的な意見である。

一方、留学生に自文化を紹介しようとして、「自分も初めての体験(茶道)ができた」と日本文化について考えることにつながった感想も見られた。

##### 【教員のアンケートをもとに】

「留学生に授業をしていただくという試みは初めてでしたので、多くの国々の方々が文化を紹介して下さったのはとても新鮮でした。」

「留学生が一生懸命、自国を紹介してくれている姿に、普段は英語に抵抗がある生徒も同じように一生懸命、理解しようとしていて、教科の英語ではなく相手を理解するための方法として捉えてくれたのではないかと思います。」

「4時間目に留学生も不安だということが伝わり、親近感が沸きました。生徒たちも同じで、初めは様子を伺っているような感じでしたが、次第に身を乗り出すように留学生の話を聞くようになりました。遠い国が身近に感じた有意義な時間だったと思います。」

「一生懸命英語で話す生徒、聞き取ろう、理解しようとしてくれた留学生、理想的なコミュニケーションが生まれたと思います。」

生徒の評価については、

「英語圏以外の日常では交流することのできない方々と触れ合い、また事前に留学生の国の文化などを興味を持って楽しそうに調べている生徒達に関心しました。私自身とても楽しかったです。」

「日本文化を改めて知ることにおいて意義はあった気がする。」

「文化交流を意識したクラスもあり、総合学習の時間の使い方として相応しいと思いました。」

「直前まで何をもって「おもてなし」するのか決まらなかったが、HRの委員長、副委員長が中心となり、とても良い雰囲気交流会となった。昼食時も留学生と一緒に過ごした生徒も多く、7限目の授業で平常に切り替えるのが難しいくらい盛り上がった。」などがあつた。

しかし、運営面などについては、

「結果的には理想的な授業の雰囲気、交流の場ではあつたが、とにかく準備に時間がない。この度のようにパソコンの接続や机、椅子の配置替えなど、休み時間の10分だけでは難しいし、教員サイドの配慮も欲しいと感じた。」

「事前に各HR共通のプロフィールなどがあれば、交流会の内容などに活用できると思います。各HRによって事前に入ってくる情報量に違いがある。」

「考え方が人それぞれ違うので仕方ないかもしれないが、私自身は薄く、浅い知識よりも留学生の国やその人の人柄などかわかるような事を一つでも知りたい。もしくは留学生がこちらに来る理由から徳島の良さを認識したい。」

「留学生は何が好きで、どんなことをこの交流会で知りたいのか、リクエストがあれば交流会の内容が決めやすいと思いました。」

など、事前準備の忙しさと情報量の少なさについての意見が多かつた。

今回の交流会は例年とスタイルを変えたため、新たな成果もあったが、その分課題も多かったといえよう。2年前に「この交流活動を『進路指導』の『前提』や、『学習活動』の『弛緩』としない工夫を重ね続けることが必要」と総括したが、この課題については教員側への理解が深まり一定の進歩が見られた。その一つの要因に秋祭への共同参加によって、徳大国際センターとの連携教育が理解されてきたことが大きい。イベントを増やすだけでなく、繋がりをもって深めることが肝要であることが分かる。

#### 4.2. 大学（キャラバン隊）のアンケートから

留学生8名中、日本語研修コース参加の6名からアンケートを回収できた。アンケートは英語で書かれており日本語に訳したものである。

今回訪問した留学生8名は、訪問研究者モンゴル人医師1名と中国人研究生1名と前述の日本語研修コースに参加する日本語初級者6名であった。この6名はそのうち4名（エルサルバドル・ホンジュラス・ブラジル・インドネシア）が自国で高校や短大の教員であり、他の2名（ポーランド・中国）は薬理学と工学の博士課程の学生である。

以下6名のアンケートの内容である。

- ① とてもおもしろかった。生徒たちはとても親切にそしてよくしてくれた。彼らは私と英語やスペイン語を話したがっていた。
- ② 日本の高校で、少しですが私の国について話したり、日本語を練習したりする機会があったのでとてもうれしかった。また、インタビューや学校案内で日本の学校を知るチャンスにもなったと思う。
- ③ 素晴らしかった。このプログラムは生徒達と離れていて寂しかった私の今の気持ちを癒してくれた。
- ④ この訪問はとても楽しいし、おもしろくて良かった。高校で生徒といろいろな事を話せた。
- ⑤ 好奇心があって賢くて、協力的な高校生と楽しい体験ができて、とても良かった。また、自分の国を紹介し、日本文化について学ぶ機会もあった。このようなイベントにはまた参加したい。
- ⑥ 日本の教育システムについて理解することができた。私の期待通り、高校生は高いレベルの教育と文化、ふるまいなどとてもすばらしかった。

キャラバン隊を送った側の三隅の考察である。昨年の交流会との違いは、二つあった。前回は日本語のレベルが中級以上の留学生であったが、今回は一人を除いて未習あるいは初級だったため、どのように交流が進められるかという点である。もう一つは、「キャラバン隊」の主旨からゲストとして訪問するのではなく能動的な活動「自分の国や町さらに文化や習慣に関して」45分クラスで授業をすることであった。こちらの心配をよそに、簡単な日本語駆使する者、生徒からの要望に応じて英語で説明する者、漢字を板書して乗り切る者、もちろんクラス担任の適切な助けが得られて生徒への授業はおおむね成功したといえる。

前回の「一日高校生体験」で授業担当の先生方に圧力をかけたようだったが、今回は自分のクラスの生徒と留学生を結ぶ役割を担った。これも先生方の新たな体験であったように思う。

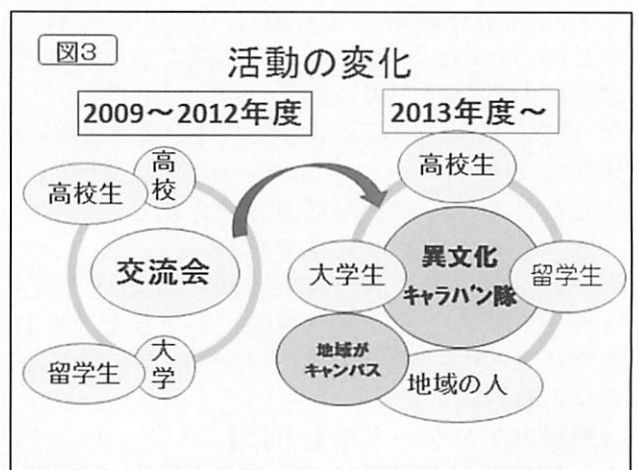
#### 5. 考察：二つの活動を通しての評価

前回の論考（注1）においては「異文化理解を目標とした他機関との交流に関してのポイント」を交流活動のみに焦点を当てていたが、今回は大きな枠組みの中で新たに活動を振り返る。

##### 1) 明確な教育目的とそれに基づいた活動設定

これまでに互いの教育目標を実現するための交流活動ということがすでに双方ともに合意として理解ができていた。そこへ今年度は、文部科学省の「留学生交流拠点事業」と徳島県の「地域がキャンパス」という二つの枠組みの中で活動の形を変えてまた大きくさせて実現することとなった。

図3



以前のように高校と大学の教育目標の追求のみならず、それぞれの事業目標を確認する必

要も生じている。それは、「地域がキャンパス」に関しては、「若者の流出により地域の活力低下が進む状況で大学と連携し、若者の発想、視点及び行動力を生かした地域活性化の取り組みを推進する」ことであり、一方の交流拠点事業では「留学生の力を生かした地域の活性化」から徳島大学は独自に「多文化共生のまちづくり」を最終目標としている。

#### ①日本語を共通語にしていくこと

留学生らは日本に来て専門を研究しながらも日本語の習得を望んでいる、何よりも日本人とのコミュニケーションを大切にしているからである。日本人側が通じる、分かりやすい日本語を話すことによって意思疎通のために互いが歩み寄ることができると思う。

#### ②言葉から始めて互いの文化（考え方や習慣）を分かり合うこと、

そこから共通の課題を解決していくこともできるだろう。

#### ③遍路文化に見られる「おもてなし」から始めて、「おもてなし」を越える日本人側に「受け入れる心」を育てること

「多文化共生のまちづくり」はこのような①-③を実現していくことによって「同化」から「共存」を目指す社会であり、これを構築することを大学は推進している。

この視点からは、現在の活動は交流会から、祭りへの参加と交流会が異文化キャラバン隊の活動に含まれることによってその意義が強力なものとなっている。また高校と大学といった二つの教育機関の取り組みではなく、互いの場所から離れて、より広い地域の中で多くの人が関わる活動となったことも特徴であろう。

#### 2) 学習者（参加者）の現状を判断すること

「祭り」は特殊な活動である。というのはいくら資料を調べて知識として理解はしたとしても体験しなければわからないものである。今回の祭りは男性にとって大変な労力が必要なまた海に入るという点では危険を伴うものである。実施者の全員がその内容を理解していたとは言い難いが、祭りを運営する「ちょうさ保存会」や南部総合県民局等の行政側の対応が、参加者に対して丁寧な説明を行って、参加者を誘導したように思う。祭りに参加するための準備と、日本人高校生や大学生にとっては外国人との活動が、留学生にとっては、日本文化を知る、日本人と一緒に活動できるという好奇心が何よりも参加の意欲を高めていた。

「祭り」を体験した後の、高校生と留学生の交流は実施者（高校教員・大学教員そして大学事務局）にとっては危険を伴わない、学内での

交流活動といった点で精神的な緊張が明らかに少なかった。また何よりも、祭りに参加した1年生及び3年生らが主体となって交流活動を盛り上げてくれていることがわかった。彼・彼女らがお迎え学生への志願してくれたことと昼食の時の留学生への接し方や態度でそれは明確であった。年に一回の交流だけでは生まれない関係ができていたように思う。

#### 3) 活動のプレタスクとフォローアップの充実

「祭り」のプレタスクは、高校教諭による大学での「祭り」及び「県南地区の文化」に関するミニ講義がその役割を果たした。フォローアップに関しては、異文化キャラバン隊の活動として新聞（徳島新聞・朝日新聞）や放送局（四国放送・NHK）に取り上げられたことからの振り返り、そして事後のアンケートによる問いかけ、また実施者による1月の反省会といった内容を参加者に伝えていく必要がある。

「交流会」に関しては、前述のように「祭り」自体がプレタスクとなっていた。前回の反省でもあった、事前の準備に関しては足らなかったことで、交流会を準備する高校教員と生徒たちに「自分たちのクラスにどんな日本語レベルのどのような興味関心を持つ留学生が来るのか」といった基礎的な情報を伝えないままに実施することになり、今回は迷惑をかけた事実がある。これは大学側の改善のポイントである。ただし今回は10月から日本語学習を始めた留学生が（8名中6名、1名は中級、1名は日本語未習）多く、目の前の留学生から情報を得て判断してもらうしかなかった。事後の評価はアンケートとしてまたこのように論考として結果をやはり伝えることそして次回に活かすことを考えている。

#### 4) 実施者（担当者）同士の綿密な話し合い

高校と大学の関係では、7月の出張講座と1月の訪問から、今回は多くの話し合いの機会を持つことができていたように思える。互いの目標を越えた事業の目標に関する摺合せがきちんとできていたかは疑問であり、反省の余地がある。前回にも書いたが、双方の機関が集めた振り返りを丁寧に考察し、互いが互いの評価者となることも、この活動の意義を考え改善を加えてさらに継続するのかどうかを検討することになる。

今回は、実施者として高校の教員が2名、大学教員も2名そして大学の事務局が2名さらに、県南部の行政関係者1名、と前回に比べて、事業が拡大すると同時に実に多くの担当者が話し合うことが必要になった。

#### 5) 教育に直接関わる者以外との連携

「祭り」をめぐるには実に多くの方々と連携を取る必要があった。それは、行政をはじめとして、NPO 団体、美波町の首長、町議会、ボランティアガイド、祭りの保存会、日和佐神社、報道関係者そして町の人々といった方々との連携である。改めて教育機関同士の「交流会」とはかかわる人たちの規模が違うことがはっきりと認識できた。1月18日の反省会で、反省とともにいろいろな声を聞くことにより、アンケートでは取れなかった来年のための情報を得ることができた。様々な方法で情報を収集することと収集できるための関係（人間関係作り）も必要なこと感じた次第である。これもやはり前回書いた内容であるが、交流活動が互恵的な意味を持つための様々な工夫が必要なことそれが持続にもつながると考える。

今回の活動を通して更にもう一つの視点が必要なことが明らかになった。それは6) 活動そのものを広報する必要性である。徳島県には外国人は約五千人、留学生は約350人（平成22年調査）との人口に対する割合は都市部に比べて低いと言える。地域で会うことも触れ合うことも少ないのが現状である。留学生を国際化への人的資源（リソース）と考えて活用するというのが徳島地区の「留学生交流拠点事業」の意味とも考えられる。日和佐への祭りの参加は新聞、テレビ報道というメディアに取り上げられ多くの人に本活動が紹介された(注10)。外国人との共生を考えるきっかけを地域の人々へ与えていくことにつながるだろう。メディアから知ること自身自身は今体験していないが、これからの可能性も含めて知見を共有していくことにつながる。さらにこのような論考を提示していくことも、これから交流を進めたり、活動を企画したりを考える人たちへの支援となると考える。

## 6. むすびにかえて

本稿では、前回の論考に続き、大学と高校の連携による交流活動（多文化理解活動）を新たな事業「とくしま異文化キャラバン隊」に組み入れ、事業評価として得たアンケートや実施のための話し合いや反省会等から得た内容を省察し、その意義を考えた。

今回の取り組みによって、地域を舞台に数えきれない多くの人々への影響があったように思える。多くの人に関わり、丁寧に活動を振り返りまたこの事業を続けていくことは、本事業の「多文化共生まちづくり」への一歩を踏み出していることにほかならない。

また祭りに参加しているインドネシア人介護士や外国籍の妻にも出会った。彼・彼女らは地域に根付いて暮らしている外国人である。祭りに地域の人として参加している姿に触れることができた。数こそは少ないがこのような在住外国人の存在を浮かび上がらせ、地域の人に外国人との共生を違った視点で考えてもらう、そのようなきっかけになるように継続した活動を行いたい。今後も多くの人と協力し合ってまた新たな一歩を踏み出したいと考える。

注1. これまでの経緯考察は生駒佳也・Gehrtz 三隅友子（2012）「地域の国際化を目指す高大連携の可能性-交流活動のもたらすもの-」2011年度徳島大学国際センター紀要 p.25-32 にまとめている。

注2. 本事業に関して、さらに平成25年度の活動記録と参加者の声、また新規活動募集等の情報についてはホームページに詳述している。

ホームページ

<http://www.isc.tokushima-u.ac.jp/caravan/>

注3. 地域がキャンパス事業

徳島県では、少子化や若者の流出による人口減少により地域の活力低下が懸念される南部圏域において大学と連携し、若者の発想、視点及び行動力を生かした地域活性化の取り組みを推進する目的で平成24-26年度に計画実施している。概要として①地域をキャンパスとした取り組み②大学の地域活動拠点の整備③ゼミ合宿の誘致等が実際の活動である。（徳島県ホームページより）

注4. ただし、同丸山書では、従来「和射」を上灘（由岐・日和佐・牟岐の海岸沿い）に、下灘（現海陽町の海岸沿い）に比定してきたが、古代では「和奈佐」「和射」は同じ地域をさし、下灘も含む広い地域ととらえている。

注5. 「よろづひかえ覚」、『日和佐町史』、p.1109

注6. 真貝宣光・三木安平「宝暦期における日和佐廻船業社の動向」『阿波学会研究紀要第43号』、1997

注7. 『徳島県漁業史』、p.478

注8. 『「日和佐八幡神社秋祭り」と「日和佐ちようさ保存会」の活動について』（日和佐ちようさ保存会パンフレット）



注9. 科学研究費補助金研究『国民的歴史学運動の京都地域における展開過程に関する研究』平成 19～22 年度

注10. 掲載新聞、メディア報道 10 月 14 日  
・徳島新聞朝刊「太鼓屋台 威勢よく海へ」  
・朝日新聞朝刊「お浜出で留学生ら 72 人応援」  
・四国放送及びNHK のニュースで報道

入れと誠実にアンケートに答えてくださった高校の先生方と地域の方々に感謝の意を表します。

## 参考文献

笠井藍水『海部郡誌』海部郡誌刊行會、1927  
佐野之憲編、笠井藍水訳『阿波志』歴史図書社、1976（ただし原本は同名の 1815 年編纂の藩撰地誌）

笠井藍水編『日和佐町郷土誌』日和佐町、1957  
日和佐町史編纂委員会編『日和佐町史』日和佐町 1984

Gehertz 三隅友子(2001)「地域における多文化理解の取り組み」第 14 回日本語教育連絡会議報告書 P.106-111

徳島県漁業史編さん協議会編発行『徳島県漁業史』、1996

平凡社地方資料センター編『徳島県の地名』平凡社、2000

丸山幸彦「カイク（海部）とソラ（空）の世界」三好昭一郎・高橋啓編『図説徳島県の歴史』河出書房新社、1994

高橋晋一「日和佐八幡神社の祭礼についてー「お浜出・お入り」儀礼を中心としてー」『阿波学会研究紀要第 43 号』、1997

佐藤文哉「徳島県南部における宗教儀礼と社会組織」石躍胤央・高橋啓編『徳島の研究』第 6 巻、清文堂出版、1992

E・ボブズボーム/T・レインジャ編『創られた伝統』前川啓治・梶原景昭他訳、紀伊國屋書店、1992

## 付記

本論考は、生駒、三隅が筆者であるが、この事業そのものは多くの関係者の努力によって実施された。徳島県南部総合県民局、美波町役場、日和佐ちょうさ保存会の関係者の方々には多大な協力をいただいた。徳島大学の国際課には、事務局として引率及びアンケートの作成、回収、集計、実施、及び行政各部所との連携など所業務全般を行い、本論考の要所を担ってくれたことを加えておきたい。

今回の活動を一緒に活動した生徒・学生・留学生のキャラバン隊のメンバーと、さらに受け

## 資料 1

### アンケートご協力をお願い

この度は、留学生の秋祭り参加についてご協力いただき、ありがとうございます。

徳島大学では、文部科学省受託事業「留学生交流拠点整備事業」のもと、異文化交流を通じた地域の活性化を目指し、留学生と地域の方々との交流の場を数多く設ける予定です。今後の事業改善に役立てるため、アンケートにご協力をお願いします。

1. 今回、留学生が参加することについて、不安はありましたか。

①あった

※具体的に、どのようなことが不安でしたか。

[ ]

②なかった

2. 留学生と過ごしたことで、外国人に対する印象は変わりましたか。

①変わった

※具体的に、どのように変わりましたか。

[ ]

②変わらない

3. またこのような機会があれば、留学生に参加してもらいたいですか。

①参加してもらいたい（理由： )

②参加してもらいたくない（理由： )

4. 留学生の視点やアイデアを取り入れたい場面・事業はありますか。

①ある（具体的に： )

②ない

5. 地域における留学生（外国人）との交流について、自由にご意見ををお願いします。

[ ]

ご所属 ( ) お名前 ( )

ご協力ありがとうございました。

## 徳島大学留学生交流会

2014/1/17

## 【日程】

11:00 徳島市立高校集合

\* 4限が始まる前に各クラス代表2名が留学生を迎えに行ってください!

11:45~12:30 4限 留学生による特別授業 ※1

12:30~13:10 昼食 (カフェテリアにてランチ)

13:10~13:55 5限 クラス交流会 ※2

14:05~14:50 6限 留学生振り返り

15:00~15:45 7限 2・3年生(約10人)との交流会  
(留学の動機, 高校時代, 大学でのことなど・・・)

## ※1

今回の留学生は例年より年上で自分の専門性を持っている人が多いこと, また教育に関わっている人が多いことが特徴です。留学生には簡単な英語か日本語も交えて自分の専門について, また自国のことなどを話してもらいます。

## ※2

4限の授業をもとにクラスで交流会をお願いします。留学生に対する質問, または自分たちの紹介, さらに留学生が興味を持っている日本の高校生についてたくさんの交流が生まれることを期待します。例年のように何かイベントを設けてもいいですし, 踏み込んだ話し合いも面白いと思います。

## 【クラス分け】

	担任 Homeroom Teacher	留学生
101HR	矢野 Mr. Yano	オリゴさん M(モンゴル) 医師
102HR	稲川 Ms. Inagawa	ソニーさん M(インドネシア) 英語教育
103HR	有井 Ms. Arii	プラさん F(ブラジル) 教育哲学
104HR	河野 Mr. Kawano	コメイメイさん F(中国) 日本語研究生
105HR	巽 Ms. Tatsumi	リュウさん M(中国) 知的力学 建設ドクター
106HR	岡本 Mr. Okamoto	アレハンドロさん M(ホンジュラス) 機械技術
107HR	井口 Mr. Iguchi	リカルドさん M(エルサルバドル) 英語教育
108HR	平野 Ms. Hirano	トーマスさん M(ポーランド) 薬理学ドクター

\*の方は日本語少しOKとのこと